

八代焼(高田焼)

八代焼 - 茶器(ちゃき)の世界

八代焼が、安土桃山時代から江戸時代の初めにかけて活躍した大名茶人(だいまいよう ちゃじん)、細川三斎(ほそかわさんさい・1563~1645)と関係の深い陶器であることは前に述べたとおりです。三斎は、京都生まれで、若いころ、千利休(せんのりきゅう)という茶道の名人に指導を受けました。後世には、利休の七哲(しちてつ・七人の優れた弟子)のひとりに数えられたほどの茶道の達人(たつじん)です。

茶道に使う主な茶器で陶磁器(とうじき)製のもの

- 1 茶入れ(ちゃいれ) 抹茶(まっちゃ)の粉を入れる器、小さいけれど高級な陶器
- 2 茶碗(ちゃわん) 茶を飲むための器
- 3 水指(みずさし) 釜(かま)に入れる水をたくわえる器、大型
などがあります。

八代焼初代喜蔵(きぞう)時代の作品(17世紀)

今から三百数十年前

八代焼の最初の窯である奈良木(ならぎ)の窯跡(かまあと)から発見された茶碗や水指などを見ると、唐津焼(からつやき・佐賀県)そっくりの鉄絵(てつえ・鉄分を含む茶色の絵具で絵を描いたもの)の茶碗、上野焼(あがのやき・福岡県)そっくりの茶碗、高取焼(たかとりやき・福岡県)に似た水指など、同時代、九州の他の地域の窯の作品に似た作風(さくふう)が見られます。おそらく、これらは三斎をはじめとする茶道を愛好した人々の注文により、当時、茶の世界で人気のあった作品を写して、形、土や釉薬(ゆうやく・うわぐすり)を似せて作ったものなのでしょう。

喜蔵時代の作品は残念ながらほとんど残っていません。他の窯の作品にまぎれてしまっている物も少なくないのではないのでしょうか。

八代焼の個性が生まれる(18世紀) 今から二百数十年前

喜蔵とその子の時代(17世紀)ころまでは、八代焼にはそれほど強い個性は見られません。むしろ、先ほど述べたような他国の作品とあまり区別のつかないものや、朝鮮半島の作品を写したものに名品(すばらしい作品)が知られています。ところが、18世紀に入るといかにも八代焼らしい作品が多く焼かれるようになります。素朴(そぼく)で力強い形に、絵画的な象嵌文様をおおらかにほどこした水指や茶碗も残されています。茶碗の底には、八代焼らしい右回りの渦文様(うずもんよう)が大きく削り出されたりします。



牡丹唐草文茶碗

ぼたんからくさもんちゃわん

江戸時代(18世紀)

技術が最高となった時代(19世紀以降の作品) 今から百数十年前

1800年前後ころをさかいとして、八代焼は現在の高田焼(こうだやき)に近い作風へと変化します。これは、おそらく窯の構造などに改良が加えられたこと一技術的な進歩、藩の製品管理により作品のできにばらつきが見られなくなったことなどが関係していると考えられます。形、象嵌の技術は完璧(かんぺき・完全)ですが、作品には整いすぎた冷たさのようなものが見られます。茶道具としての味わい、おもしろみは逆に薄れたともいえるでしょう。



象嵌牡丹文茶碗

ぞうがんぼたんもんちゃわん

江戸時代(19世紀)